

2023年11月12日  
宮崎中部教会主日礼拝  
牧師 乾元美

詩編 15 : 1～5

エフェソの信徒への手紙 4 : 25～29

「役立つ言葉」(第九戒)

(ハイデルベルク信仰問答 十戒について 問 112)

※問答は「日々の祈り」をご覧ください。

【招詞】詩編 95 : 1～2

【讃美歌】 27 「父、子、聖霊の」

【詩編交読】 詩編 102 編

【赦しの宣言】 イザヤ書 55 : 7 「主に立ち帰るならば、主は憐れんでくださる。

わたしたちの神に立ち帰るならば／豊かに赦してくださる。」

【讃美歌】 1 「主イエスよ、われらに」

【祈祷】

【聖書】 詩編 15 : 1～5

エフェソの信徒への手紙 4 : 25～29

【説教】 「役立つ言葉」

<簡単な戒め？>

今日は『ハイデルベルク信仰問答』の「十戒について」から、「第九戒 隣人に関して偽証してはならない」についての御言葉に耳を傾けます。

十戒の後半は、隣人との関係に関する戒めが中心となっていて、これまで、殺人、姦淫、盗みについての戒めが語られてきました。これらはどれも、誰もが、中々に重い罪だと認識するような罪です。

その中で、今回は「隣人について偽証してはならない」との戒めです。

偽証。偽りの証し、と書きます。これはつまり、嘘をついてはいけない、ということなのでしょう。そうだとすると、この第九戒は、もしかしたら、殺人、姦淫、盗みなどの戒めよりも、もっと身近で、軽いことのように、感じられるかも知れません。

「隣人に関して偽証してはならない」。嘘をつかなければ、わたしたちはこの戒めを守ってことになるのでしょうか。この戒めは、いったい何を求めているのでしょうか。

<裁判のこと>

この戒めに関して、始めに知っておきたいのは、この第九戒は、そもそも公的な裁判における証言のことを言っている、ということです。裁判の証言台に立って、物事の真実を明らかにする場面です。そこにおいて、隣人に関して偽証してはならない、とされています。

たとえば、裁判で、真実をまげて、偽りの証言をします。

するとそれは、裁判の判決を誤らせることになり、被告人の、有罪、無罪に影響します。もしそれで、無罪の人が有罪となってしまったら、正しい人の名誉や尊厳を傷つけることになります。さらに有罪なら、罰によって、死刑になることもあります。そうなれば、ある人の偽証が、一人の人間の尊厳も、人生も、命も、また家族をも、破壊することになってしまおう。さらには、そうやって、公の裁判の公平さや信頼を失わせることは、共同体の崩壊へと繋がっていくのです。

言葉は、いとも簡単に口から発せられます。でもその言葉によって、偽りの証言をしたり、真実を曲げてしまうときには、命や共同体に関わる、大変なことを招いてしまうのです。

そして何より、神さまは、すべてをご存知の方であります。偽りを語ることは、神さまに対して偽りを語ることに他なりません。このように、神さまに背き、また隣人や共同体を破壊へと追いやっていく、このような偽証を、第九戒は、厳しく戒めているのです。

### <身近な偽証>

もしかすると、わたしたちが、裁判の席で証言する機会というのは、滅多にないことかも知れません。しかし、『ハイデルベルク信仰問答』はこの戒めを、裁判の場だけでなく、わたしたちが日々の生活の中の、隣人について証言する、あらゆる場面において、守るべき戒めとして教えているのです。

今日の間 112 を読んでみたいと思います。答えは、二段落目まで読みます。

問 112 第九戒では、何が求められていますか。

答 わたしが誰に対しても偽りの証言をせず、誰の言葉をも曲げず、陰口や中傷をする者にならず、誰かを調べもせず、軽率に断罪するようなことに手を貸さないこと。

かえって、あらゆる嘘やごまかしを、悪魔の業そのものとして神の激しい御怒りのゆえに遠ざけ、裁判やその他のあらゆる取引においては真理を愛し、正直に語りまた告白すること。

…現実には、わたしたちは、いとも簡単に、そしてとても巧妙に、真実を曲げて、言葉を語ることがあるのではないのでしょうか。また、人の言った言葉を、曲げて解釈したり、伝えたりすることもあります。

自分を守るために。責任を逃れるために。相手の機嫌を損なわないために。いつだってわたしたちは、自分が不利益を被らないためなら、ほとんど本能のようにして、嘘や、ずるいごまかしを、口先でやってのけているのではないのでしょうか。

また、わたしたちは、あまり深く考えないで、軽率に誰かの陰口を言ったり、あるいは、それを聞かされたりしています。そして、あまりよく知らないのに、人を軽率に判断する。あの人のあれがダメ。ここがダメ。本人がいないところで、勝手な評価を下します。

さらには、そのようにして、人から聞いたことを鵜呑みにしたり、根拠のない噂を信じることも、同じ穴のムジナでしょう。

まったく自己中心的な思いが。自分だけが良ければいいという、自分勝手な罪が。わたしたちの語る言葉を、偽りの、不誠実な、愛のない言葉にしているのです。

実際、この隣人に関する偽証の罪は、わたしたち自身にも、わたしたちの周りにも、とても軽はずみに、しかし、とても深刻に、はびこっているのではないのでしょうか。

だから信仰問答は、裁判に限らず、日常に起こっている隣人に関する偽証もまた、「悪魔の業そのものであり、神さまの激しい御怒り」を招くことである、と警告しているのです。

#### <真実を語る>

そして、この第九戒が本当に求めていることは、問 112 の答えの最後の段落に、こう語られていました。「さらにまた、わたしの隣人の栄誉と威信とをわたしの力の限り守り促進する、ということです」。

つまり、わたしたちの言葉が、隣人を破滅させ、共同体を崩壊させるものではなくて、むしろ、隣人を生かし、守り、愛する言葉であること。そして、隣人とのよい関係を築いていく言葉であることを、求めているのです。

今日の、エフェソの信徒への手紙 4:25 には、こうありました。「だから、偽りを捨て、それぞれ隣人に対して真実を語りなさい。わたしたちは、互いに体の一部なのです。」

また、29 節にはこうあります。「悪い言葉を一切口にしてはなりません。ただ、聞く人に恵みが与えられるように、その人を造り上げるのに役立つ言葉を、必要に応じて語りなさい。」

隣人に対して真実を語りなさい。聞く人に恵みが与えられるように、その人を造り上げるのに役立つ言葉を、必要に応じて語りなさい。

これこそ、わたしたちが語るべき言葉なのです。

「真実を語る」。この「真実」という言葉の本来の意味は、覆いを取り払う、事実をあらわにする、という意味です。ですから、真実とは、事実であること、本当であること、と言えます。

そして、わたしたちの、本当は、真実は、揺るぎない確かなことは、神さまにしかありません。「真実」という言葉は、聖書において、神さまの正しさ、神さまの真理、を意味する言葉として用いられていることもあります。

そうであるとしたら、「真実を語る」ということは、わたしたちが、自分がこれこそ真実だ、本当だ、と思うところを語ることではない、ということが分かります。

わたしたちは、神さまの真実を語るように。神さまの正しさによって語るように。神さまに基づいた言葉を語るように、とされているのです。

神さまの真実。あるいは、神さまが正しいとされること。それは、わたしたちが、神さまに愛されていること。そして、わたしたちが、神さまを愛し、そして隣人を愛すべきものである、ということです。

ですから、わたしたちの言葉は、神さまの愛に基づいて、隣人を愛するために発せられる言葉であることが、求められているのです。

神さまの真実。神さまの正しさ。神さまのまこと。それは、常に、いつも、わたしたちを、神さまの愛へと方向付けるものです。

ですから、どのような立派な言葉でも、偽りが無い言葉でも、愛がなければ、思いやりや、配慮がなければ、それは、神さまが求めておられる言葉にはなりません。

たとえば、明らかに、誰が見ても、間違っている人がいるとします。だから、間違っていると指摘する。確かに、偽りは言っていませんし、本当のことを言っています。

でも、皆の前で、間違いを指摘することによって、その人が、周りからの信頼を完全に失うことが分かっていたら。他の人から、すっかり見捨てられると予想されたら。その人が立ち直れないほどに傷つくかも知れないとしたら。どうでしょう。

(…だからといって、黙って放っておくことは、なおさら愛からかけ離れていることです。)

確かに、偽りは言ってない。間違いを、間違いであると言い、正しいことを、正しいと言った。本当のことを言ったまで、いったい何が悪いのか。この状況において、わたしたちは、そのように主張することもできるかも知れません。

でも、わたしたちに求められているのは、そんなことなのでしょう。

この戒めは、単に、嘘をつかなければよい、というものでもないし、単に、正しいことを言えばいい、というものでもないでしょう。

#### <御言葉に生かされて>

もし、大切なことが、ただ嘘をつかないこと、ただ正しい事実を述べること、だとしたら。まず、神さまの御前に立つわたしたち自身は、どう言われることになるのでしょうか。

神さまの御前で、ただ客観的に、本当のことが述べられるなら。誰が、何と言おうと、わたしは「有罪」と言われます。間違っている。神さまに背いている。正しくない罪人。その通りです。そして、そのように断罪されて、終わりです。

しかし、わたしたちをお審きになる父なる神さまの御前で、神の御子イエスさまは、わたしたちのことを、何と「無罪である」と、証言してくださいました。

どう考えても、わたしたちは、無罪ではありません。

しかし、イエスさまは、偽証なされたわけではありません。この、わたしを「無罪」とであると証言して下さるために、イエスさまは、わたしたちの罪をすべてご自分が背負い、ご自分が、代わりに「有罪」と宣言されることを、引き受けてくださったのです。

イエスさまは、ご自分の十字架の死にかけて、ご自分の命に代えて、「この者の罪は、すべてわたしが引き受けた。すべてわたしが償った。だから、この者は無罪です」と、神さまの御前で証言してくださいました。そのような、イエスさまの愛の行いがまずあって、そして、はじめて証言された、わたしたちの「無罪」なのです。

イエスさまは、わたしたちを愛して下さり、その愛のゆえに成し遂げてくださった御業に基づいて、神さまの御前で、わたしたちの「無罪」を、真実なこととして、証言してくださったのです。

一方、そのイエスさまご自身が、この世で裁判をお受けになったときには、多くの人々によって、偽りの証言がなされました。イエスさまを憎み、貶めたい人々が、神さまの真実を歪め、偽りを語ったのです。しかし、イエスさまは、ずっと沈黙しておられました。

また、この真実を歪めた裁判によって、死刑判決を受け、十字架にかけられたイエスさまが語られた御言葉は、人々の罪の赦しを願う、祈りの言葉でした。「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです」。

こうして、イエスさまは、ご自分の十字架の死によって、わたしたちに下されるべき有罪判決を、罪と滅びの死もろともに、ご自分のものとしてくださった。そして、わたしたちを、罪から解放して、「あなたは、わたしの十字架にあって、無罪である」と宣言してくださったのです。

イエスさまは、このようにして、わたしたちを生かす御言葉を、語って下さいました。

そして、この十字架の御業を成し遂げられたイエスさまを、父なる神さまは、死者の中から復活させられました。

それは、イエスさまが、まことに神さまの真実を現わすお方であること。また、神さまの真実こそが、罪にも死にも、すべてに勝利するということを、お示しになるためでした。

イエスさまの十字架と復活の御業にこそ、神さまの正しさが、神さまの真実が、神さまの愛が、現わされたのです。

こうして、わたしたちは、生かされました。こうして、わたしたちは、イエスさまから、罪の赦しを宣言され、神の子であると告げられ、神さまに愛されている者であることを、証言していただいたのです。

これらの、イエスさまによる証言は、すべて、まことであり、真実です。

そして、ここにいるわたしたちは、このイエスさまの御言葉を信じ、このイエスさまの御言葉によって、生かされているのです。

#### <人を生かす言葉>

ですから、イエスさまの愛と真実の御言葉によって生かされている、この、わたしたちから出る言葉もまた、愛とその行いから出る、真実なものでありたいのです。

ただ、偽りを言わない、悪口を言わない、というのではなく。ただ、事実を言えばよいのでもなく。上っ面の、とりつくろう言葉でもなく。無関心で、黙っているのでもなく。

わたしたちは、目の前にいる隣人が置かれている、具体的な状況をよく考えて。本当にその人が、恵みを受け、少しでも神さまに近づき、ますます生かされていくための、愛に基づいた言葉を語るようにと、召されているのです。

「だから、偽りを捨て、それぞれ隣人に対して真実を語りなさい。わたしたちは、互いに体の一部なのです。(25 節)」

「悪い言葉を一切口にしてはなりません。ただ、聞く人に恵みが与えられるように、その人を造り上げるのに役立つ言葉を、必要に応じて語りなさい。(29 節)」

聞く人に恵みが与えられる言葉。その人を造り上げるのに役立つ言葉。

この「造り上げる」と言う言葉は、建物を建てる、と言う言葉です。それは、神さまの恵みを受けて、その人自身が建て上げられるような言葉、ということであり。また、わたしたち隣人が、共に、よい関係を建て上げていくための言葉、よい交わりを築いていくための言葉、ということです。

イエスさまが、愛による、真実の御言葉で、わたしたちを愛し、生かしてくださったように。わたしたちもまた、自分を生かして下さっている、神さまの愛に基づいた、真実の言葉を語り合うことで、互いに愛し合い、互いに生かし合うものとなっていきます。

そうして、わたしたちは、神さまに喜ばれる隣人との関係を、そして、真実な愛の群れを、築いていくことができるのです。

このように、第九戒は、わたしたちが、神さまの御言葉に生かされ、神さまの御言葉を語り合い、神さまの愛と真理に基づいた、恵み豊かな交わりを築いていくことを、求めている戒めなのです。

こういう時は、こう言えばよい、というようなマニュアルはありません。

でも、わたしたちは、言葉を語る時に、常に、隣人の状況や立場をよく考え、相手を生かし、恵みを与えるような、愛の言葉を語ろうとすること。そのことを一番の基準として、言葉を選び、言葉を発することができるように、祈り求めています。

わたしたちの言葉は、簡単に、人を呪い、貶め、傷つけ、破滅させることができます。

しかし、わたしたちの言葉は、そのようなことのために与えられているわけではありません。わたしたちの口は、わたしたちの言葉は、神さまをほめたたえ、隣人を祝福するために、与えられているのです。

まず、何よりわたしたち自身が、神さまの愛による、真実な御言葉によって、今ここに、生かされていることを、心に留めましょう。

そして、わたしたちの言葉もまた、隣人を、家族を、友人を、共に歩む人々を、日々出会う人々を、祝福し、生かす言葉となるように。また、共に神さまの恵みをほめたたえて生きていく、よい交わりを築くための言葉となるように、祈り求めています。

## 【お祈り】

天の父なる神さま

わたしたちの言葉は、実に軽率で、簡単に罪を犯します。あなたの御心に適わない、自分のための言葉を語り、人を傷つけてしまいます。どうか、お許してください。

イエスさまの真実な御言葉によって、あなたの愛を知らされ、罪を赦され、生かされた者として。どうかわたしたちの口が、あなたを賛美する言葉、隣人を祝福する言葉で、満たされるようにしてください。

真実な、愛の言葉で語り合い、あなたを共にほめたたえる交わりを、築かせて下さい。

救い主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン

【讚美歌】 4 「世にあるかぎりの」

【信仰告白】 ニカイア信条

【十戒】

【献金】 6 5 - 1 「今そなえる」

【主の祈り】

【祈祷】

【讚美歌】 2 8 「み栄あれや」

【祝福】 主があなたを祝福し、あなたを守られるように。

主が御顔を向けてあなたを照らし あなたに恵みを与えられるように。

主が御顔をあなたに向けて あなたに平安を賜るように。

主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、

あなたがた一同と共にあるように。アーメン